ら妾ハ氣ゾ揉てト云ふ顏眺めて堀口門藏ヤイ此の阿魔め巫山戯やアケるナ已の足で己が歩行よ何處へ行うが大きよ世話だ餘計な邪魔をする丈け損たサア其の手を放さねへかト小腕把つて捻伏せれば小波ハ痛さを打忘れ夫なに手酷くもないでも口で言へば分るぢやないか子何でもお前は行く了簡かへ。オヽ手前よ愛想ゞ盡たかち是より江戸へ歸る氣だ。ナニ夫ならお前ハ今の前妾に言た深切は。皆な手前を口先で殺して肌の三百兩を卷上るまでの深切だ手前のやうな三平二滿に何時まで鼻をくッ垂して居る二本捧たア當ケ違はア今日を限よ暇を遣るうら勝手な處へ行きやアケれト始めて明す本心よ小波ハ悲歎さ腹立しさよエヽ胴慾な門藏どのお前は本氣でお言のかへトまた賓縁るを蹴飛せば何でも遣らぬと取縋るを踏据ゑ捻伏せ往かんとすれど女の一心中々に松にからみし藤蔓離れ方なく見ねしりぞ焦燥て杖取上げ眼顏を分ず打据ゑ〳〵ひるむ處を蹴返して後をも見ずに駈去つたる丶惡よ酬ふよ毒を以てす造化の配劑不可思議と後よぞ人ハ稱えける何某の太上天皇が御製に忘らる丶身を知る袖の村雨よつれなく山の月は出けり此れハ戀ゆゑ時雨來る涙の袖の未だ干ぬよ山の端出づる月影のあやなく照すと恨の歌是れは操の一筋よ守り詰めたる心から人目を

忍ぶ秋ハ野よ集く虫よも心なく小萩が末の露の玉落て摧くる憂思ひ涙を拭ふ袖さへも有りしよ變る襤褸布襤れ一態を心なく見する夜中の月代を恨みる貞婦が心の誠あはれを誘ふ小夜嵐よ積る思ひぞ切なかる爾る程に小森村の里正田中仁平ハ罪なき罪に罪なはれて心ならずも拘引行くに郡率行山口は怒れる眼に朱を濺ぎて掟を破り屆けもなさず夜船よ乘て族立したるゑ密かよ江戸へ赴きて密訴をなさん爲なるべ一此の義具直よ招丁せよと責れど仁平ハ騒ぐ色なくいな私生ハ親類よ急病人の有るに仍て其方へ參る心なれば手荷物とても持參せず一日を爭ふ故を以て夜船を雇ひ候ひ一と申し開けど少しも肯ず其の分疏は立ち難し汝捕方の向かひしをり何ものあるか水中へ打ちーつめたる趣むきあるが察する處ろ書類などの證據となるべき品々を投水一たるにうたゞぴなし殊よ蟄居の身を持ながら上の許可も受もせず自儘よ他出を致す段奇怪至極の舉動なり是でも分疏ありやと言ば仁平は阿々と打笑ひ證據の品を投水せしとは思ひも寄らぬ御疑ひ捕方俄ごに手を以て押伏なされし夫れ故よ氣の毒ながら傍ちなる旅人の荷物の蹴ー飛で川ゑ落たるまでなるを手づから川へ投ぜしなどとは迷惑至極よ存ずると詞澱ます陳せーかど奉行ハ肯よ氣色もなく獄卒どもよ命を傳へ

手酷く拷問なしたれども仁平は更に口を開かず苦痛に惱むのみなれば斯てハ果じと命を下し手足には手錠を堅くおろし足には鉄のホタを嵌め身動きならぬやうなし獄舍の裏に禁置しが猶も心に飽足でや窪田村の原中へ三尺牢と俗に稱ぶ手狹き牢を繕へて其ヶ中に押込めつ三度の食も番卒の手を以て食する其の間には虫を投じ蛇と追込み種々に手を換へ品を變へ殘酷非道の責苦をなし後に調も打棄て死するを竢つの情態なり無悲やな妻お勝は娘お鶴と唯二人良人の便りを竢つ程に思ひ設けぬ代官所より里正家督を沒收の旨執達ありて只得も奴婢們に暇を遣はしつ村の外れへ矮少なる家を購ひ移り住み爲す事もなく日を送れば固より仁平は清廉にて仁を好める性なるゆゑ餘財もいと〻手薄ゐて今は煙も立かぬるに斯てはならじと人に頼み縫針業や人使ひまたは農事の手傳に細くも母子が口を糊し憂日を送に重ねつゝ良夫ヶ牢舍の苦しみを救はんものと思へども番人嚴しく守り居れば更に接近ることさへ恢はず獨り心を惱すのみ又詮術もあちざりし斯くして送る日も積り三年と過て應慶二年秋も九月の中旬となりぬ折しも門を訪ふ者あり誰そやと見れば思ひきや兄藤太郎が娘なる小波の一人訪來るに驚きながらも請じ入れ仔細を問へば小波はまた面なき体にて身

の非と悔ひ有しに事を物語りて今は何處と便るべき方もなきさの棄て小船我ヶ名の小波に縋ふて开首の宿では人に屋ハれ這首の村でハ追廻され漸々尋ねて參つたのは伯父御の難儀に伯母さんが困つてお出と聞たゆゑ切てハ今まで御疎遠に過たゆゑ詫に御手助をなさんものをと參りまーたと心底悔悟の色見えて語るにお勝も嬉しくて叔母と姪との中なればこそ斯も實意を盡しもすれ良夫の罪に溶たのも元はといへば和女の親父觀應院ヶ訴人から之れを思へば親類とて今は敵の娘めの和女誠に伯母を思ふなら是より心を改めて其の眞心を見せてたもと篤く試め我が家へ止め置しも二三日忽然街衢の風聞には寛朝君の御入國後ハ總て水野隼人殿奉行代官の務め向を嚴しく調らるゝに依り山口藤九郎は之れを憂ひ先づ彼の仁平を處置せねば水野が調に我々の曲事の露顯せん事は必定なりと思ひ謀りて近々處刑にするよーと聞よりお勝は打驚き所詮尋常一樣では良夫と救ふ術ハなし女なからも良夫思ふ其の一念は神佛もあはれ守護せ給ひなん今宵ハ空も雨催ひ宵闇なるこそ天の與へ要こそあれと縊ハし折り後追ふお鶴の手お把つて窪田の原へと急ぎ行くお勝の心ぞ健氣なる折ゐろあれ秋の宵の俄かゐ墨を流せる如く足元闇く雲低く黑白も分かぬ烏羽玉の闇に閃めく雷光を

築りに進む貞婦の一念幼けれども娘のお鶴父お逢たさ一心お母ケ誠め聽分て物とも言ず手を把られ露けさ郊外を卿蹈分け稍近づきし其の時一も燃るが如き電光と丶もよれためく鳴神の耳を劈く霹靂一聲火光を曳いて落雷する音よ母子は驚きて伏倒れたる二人が上に嵐につれて降出す雨は宛然盆を覆すよ似て篠を束ねて衝く如く草木も流るゝばかりなり然けれ

ど秋の癖とて忽ちよして霽渡り碎み切たる大空よ星の光を照そへて雲い殘らず切れたりしにお勝いお鶴を懷き上げ吻と吐く息の下よりして鳴く音哀れな鈴虫の聲幽かなる方を見れば雨に洗いれ風に削られ骨のみ殘る小家ありて非人の住家と見ゆたるが今の嵐よ家根を取られて内よい住む人あらざるよお勝い此そ我が冥人の三年の憂苦と重ねたる牢ある方と思ひつゝ探り寄たる三尺牢の側よ進みて壁低めモシ仁平どのお前はマア嘸かし難義で御在ませう救ひ出す事ならずとも切てい食餌を持進び御側で介抱せんものと思ふお任せぬ番の嚴しさ此の寒田野の近所へい近づく事もならぬので今日まで控へて居まーたが控へられぬ

は孔前の命明日を限りと聞くからハ猶躊もならず助けよ來た心を神の憐れみてや先刻の雨よ番人の居ぬは孔前の命艸延びるしるしで御座ませうモシ仁平どの氣を聢に早う脱て下さいまし幸ひことよ斧があるも今戸を開けて上ませうト言ばお鶴も詞を繼ぎコレ父、様此のやうな淋ちい處へ居ないでも家ハ立派よあります坊と一緒に歸つて下され今晩からハ衆順うお前に世話とやかせませんトいふを聽居る仁平よお勝あとなき詞よいや増る歎きを止めて力を増しお勝ハ斧を振上げて打ば碎くる鐵の錠の憂然と落たるを虎と見て立つ磐石を貫ぬく矢先の想ひありふ勝は嬉しく戸をうち開きサア此の間よと手を把れば仁平は虫よりいと細き聲音ながらよオ、お勝ろお鶴も大きう成りやつたの迚も此世で逢まいと思つた妻や娘よりも逢ふ喜びよ引換て足腰立ぬ此の疲勞志ざーは嬉ーいが脱ても所詮逃れぬ命强慾非道の山口が刄よ罹つて死ぬ氣ゆゑ和女等母子は存命て後世の營み頼むぞや今更身性未練よも逃るよ増た知死期時魔期は疾に極めて居る番の非人よ見られてハ和女們二人が身の上ゆゑ此の間よ早う歸つて呉れトいふ言毎よ息切れて哀れよ痛む胸先を擦りながらもお勝は詰寄り此のマア肉の落ちた事手足は枯木よ等ーいやうよ成るまで實た山口面今に思ひ知らーて遣ん、サアモウ手錠もホダもない氣の弱い事仰やらずに一寸伸れば丈とやら聢心と孔持なさい何やら月の光が見える此の間よ些も路を急ぎ一先づ彼處の天神山まで早く早くと手を把て引出さるゝ檻の外始めて出し廣野の光景オ、忝けない女房娘と親子夫婦が顔見合せ詞ハなくて降り注ぐ涙の露よ金波を泛べ山の端出る月明り見答められては一大事とお勝は無理に手を把て東の方へ往く先の鬼怒川縁に佇立む人かげ若しやと思へばお勝の氣轉我が半纏を良夫に纏ハし手拭取つて頬冠り手を把り上る堤の上來る人ありとはまら齒の娘涙に交る一人語ホンよ因果な身の上と成たも元は心柄湯島の矢場よ居た折から那のお七さんよ氣よ入られ智惠附られて客人を騙した酬ひで現在の叔父に情を通じつゝ邸を脱て來る道の栗橋驛で肌付の金を欺き取られ一上此の身を其首へ楽られて只得伯母浮の宅へは行けど心の黒き親父さん妹智を訴人して夫れゆゑ家督も召上げられ明日をも知れぬ叔父さんの命と聞ては此の儘よ何卒命て居られやうぞ寧その事よと覺期ハーても末練の殘るハ門藏さん此の世で愛想が盡たとて未來の縁ハ必ずよ南無阿彌陀佛と唱へつゝ小石を拾ふ其風情よ驚へたれど豪氣の仁平ヤレ待て小波問ふ事あり和女を唯今殺しては妹が横死の詮議

とする證據ゲないゆゑ今暫時死する命と存命るが伯母と叔父とへ孝行ぞやト言ふ間よゐ勝が駈寄て抱き止んとするよ驚き小波ハ其の身を飜へー數丈の高き提上より流れの早く鬼怨川の水底深く飛込だりアレヨとばかり夫婦の者下うち見やる其の處へ漕寄せ來る筈船の内より立出る一人の壯士投身者ぞ助けよと示す指圖よ船頭が心得掉をさし述て小波と船よ抱き上げ介抱疎鹵ハおらさりけり良や風俗は濫れても盛りは萬よー原と尋ねてこゝにきたの郭小歇間なき客足は日本一の大門口夕暮照す銀燭の光りまばゆき不夜城よ今を盛りと咲匂ふ有情無情の色競べ花と花との仲之町よも洩れて咲や山吹の色よハうつる人情の變り易きを恨みてや木の邊を彼是此處佇立なゲら物案じに歸りも遣らぬ商人体の男を後目にかけながら肩で風切る一人の武士茶屋ゲ女よ送られて江戸町一丁目の方へ行く後を眺めて若者も同じき方に向る足進み兼てぞ見にえりける時ーも應慶三年の春ハ彌生の花咲時大口樓ハ奥二階よ間毎を隔つ名代座敷引の木頭聞楽て草覆の音も高々と遙かの先まで行過ぎて態と障子の音をさせ草覆を脱て片手に提げ片に手褄を取りながら密と一間の裏に入り障子の中へ上草覆を入れて徐々枕へ据れ　ベ客ハ寐返りーてオイお千代さんでハない　もしさん太層

來やうが早い様だが座敷の客よは授けて來たかよトいへば、もしは笑ひながら長さんハ前も苦勞性だ子授けて來やうとフリ附やうと夫は妾が胸よ有ます夫ハいろがモシ長さんお前今夜上る時店で何とか言やァしあいか昨日も今日も華車衆が聞けば華魁の客人の長吉さんといふ人ハ御店者との觸込みたけれど聢か神田の大工たといふ評判がありますゲ職人なんぞを深切よ呼だ處が見留ハなー殊には暖簾よ係はる故今夜來ら斷て歸すやうよお主なさい是ゲ内證へ聞えては何な事ゲ起らうも知れぬ那の長さんの事ばかりハモウ弗りと諦めろと蒼蠅い意見も聞飽たれど一言お前よ知らせやうと使屋どんに密と頼み呼に上ても今夜の遲さ店で木戸でも築はせぬか夫とも妾のやうなものゆゑ愛想が盡て他所外よまた增す花が出來たのかお前の顔を見るまでハ癪バかり起して居たワ人の心も知らないでお前も餘程氣樂だねトへ想はれ同志の苦說の發端長吉煙草を喫ながら夫なに御心配を懸けましてハ實よ誠よ濟ません華魁様の前ですがお前も餘程醉興ものサ今日や昨日の客ぢやァなー半纏着とは四年越知て居ながら病ひ着せて自惚根性を起させたのは何やら華魁の罪らーいぜ實ハ店へ來た時に訝う可笑く木戸を筭き斷つたので一杯でも遣て居たなら騒動だが其處は素面の難

有さ何時のブーくを仕舞て置て田中の友達の宅まで往き漸との事で昨夜の勘定二兩と借て店へ拂ひ登つて見てもお前の方が都合が何だか知れないから誂へ物もお極り丈け長居は恐れと名代へのめづり込で待て居たのサト言ふにくもし前後を見廻し大方夫んな事だらうと思つて座敷の客人よ甘い物を澤山ねだり此處へ取分て持て來たから安心して一杯行てお休みなはいお酒を詰でくすねて來たから此の湯沸で御燗をつけやうト消かとりたる函火鉢の消炭集めて行燈の灯をうつし惡紙を團扇よ換へておこし居る姿つくく長吉が實よ人間といふものは何成り行くか知れねへもんだなお前も亦は結城家の小幡樣の御家來の左平次どのと娘御であつたものが客商賣の小料理屋とまで成り下り其の時馴染で飲みに行くうち久しくお前の顏ケ見ねば何した事かと聞て見れば那の吉野屋のお千代さんはお主の爲めよ身を沈めて今では吉原の大口でくもしさんといふ全盛の華魁よ成つて居ると聞た時よは驚いたが素人の中から那の娘はと思ひ着て居たものとむざくく人の眺めよするは如何も殘念至極だと訝な處へ意地を張り半纏着でい喧しからうと店者造りで登樓たのがッィよえお前よ難義をかけ名代座敷でこつそりと他所の座敷の寄殘りで飲む程敢果ない身に成た

は實よ不思議な互ひの身の上私さへ思ひ諦めたらお前も樂に成る事と思ひ切ても來る度に優しくされると自惚て思ひ切りが何も付ねへマァ了簡をして下せへト語るよくもしは吻と息吐きもウくく言てお呉でない折角馴て種々の苦勞を忘れて居るものを思ひ出させるのは罪ですよサアお爛が出來たから一口飲んで寐やうぢやないかト差出す猪口を受けながら是え私が愚痴といふものサッパリ話しを切り換やう而して座敷のお客といふのは。ソレお前さんも知つて居る藤次郎といふ二本サ。聢か彼奴は結城に居て。奥御藩士の堀口とか言た人だと思へどもお前の方に覺えはないか。然う言れこば見覺えあるト私語やく折しも華車の聲くもしさんの華魁へくもしさんくオイくもしさん呼でるぜまた己們の來事を愚圖くン言ぢやアあるめへう今もお前お言ふ通り所詮齷齪思つても呼遂られるものではなし又己們とて然々は通ひ遂る事も出來ず未練が增るに隨つて逼るは互ひの身の上ゆゑ心の内お逢て居て霎時の間お互ひよ身を粉に碎いて稼いだのち緣があつたら一所に成り約束通り夫婦よ成て何なしがない活計でも二人で暮す事とやうヨ實は己們も篤りと今夜は夫等の和談をやうと思つて無理な算段で逢よ來た一件だ何考へても其の方が身の爲だらうと

思ふから此の處を辨まへて少しの間呼ぶ事い思ひ留つて呉なせへト言へば〳〵い濟ぬ顔
夫れい長さん水臭い嫌な苦界の憂勸め夜毎よ變る枕の數も人種種な心々泣顔見せずゐ外面
では笑つて勸めをーて居るのも泣て樂むゐ前といふ者があるから出來るのよ夫を今更思ひ
切れとは餘りゐ前も察ーがないよ夫とも外の華魁衆か素人衆よ增す花が出來て愛想が盡た
のなら男らしうよ平ッたく言て呉たがいゝぢやァないかへゐ前ゆゑなら叱られても毆打
擲をせられても厭ひなせぬと恩つて居る人の心を知りもせず体よく緣を切らうとはゐ前の
氣にも似合ない些とは妾の心にも成て見てゐ呉なはいヨト何を言ふても一筋よ思ひ詰ては
なか〳〵よ背ぬ婦人の戀慕の誠長吉殆ど困じ果猶も理を說き諭さんと思ひ定めて膝立な
ほす袤の障子をガラリと開け新造は裏へ駈入てモシ華魁へ大變ですよ坐敷のお客ゲ華魁の
お出がないので腹と立てお酒を大層飲つた上大腎すけを起なすつて華車部屋へと暴れ込み
張肱をして眞四角に何やら解らぬ事を言ひ談じと始めてゐ出なすつたが今もまた坐敷へ來
て〳〵しの處へ長吉といふ叩き大工の貧乞野郎が來て居るから夫で己をフリやァがるの
だ何でも〳〵しを呼んで來い手酷いめよ遭して遣ると妾や小供よ當り散ーて華車衆や喜助

どんが種々言て和めても中々承知をなませんから華魁鳥渡ゐ出でなすつて早う歸して下さ
いまー那なお客は顏と見るのも妾しやァ否で成ませんト泣顏ながら物語るよ〳〵い少し
疳癪れ虫を起しの黑文字を牙齒でガッと嚙み碎きいけ好ねへ腎助だよゐ前達は搆はないで
打遣かーて覺くがいゝ妾が往て歸して遣るから長さん少ー淋しからうケ待て居てお呉なは
いナト言つつ出るも荒々ーく廊下よ響かす足音に若しやと思へば長吉が後より尾いて往く
とい知らず〳〵しが部屋でい堀口門藏今は昔日の藤次郎と名を呼換へて小波より奪ひー金
のあるよ任せ此の大口へ通ひ詰め嫌はるゝとも知らざれば〳〵しに血道と上ては居れど常
に變りし今夜の扱ひ無心の金を持參せぬ其の仕返しと思ふより彌增す嫉妬に身分も忘れ大
聲上げて噪ぎ立るゐ〳〵しは衝と裏よ入ア嗟り狂ひー門藏の首よ纖手を纏はせて藤さん何
を騷ぐんですョ二才が遊びよ來やァ去まいし醉も味いも知て居なから人困らせよ外聞の惡
い大きな聲い廢してゐ呉れ腎助らーい眞似をーても妾は其の手よ乘ませんヨサアモウ何處
へも往ないから寐てから不足を聞ませう早く横よゐ成んなはいナト言ども肯な聽入ず否だ
〳〵寐やァしねへ用ありさうに呼で置て野郎の天麩羅の御馳走たァ餘り人を馬鹿よしやァ

がるヤイ此醜婦め放しやァかれト細き腕を捻上げて情容赦もあら〳〵しく投れば〳〵しも勃として汝前はん妾も生て居るよ高が金で買れた體内儀さんか何ぞのやうゐ手荒い事をせられては妾のやうな醜婦でも何處で怒る人が有ますへン手前が瓢男の癖とーて人と醜婦が呆れらァト先の程より無謝苦遮の一時よこみ上げ嘲弄する詞よ堪へぬ堀口がヤイ吐ーやァがるゐ賣女メ汝何するゥト足蹴に懸け猶踏付けんとする休よ〳〵しは驚き逃出すを汝遣てハと追んとするをマァマァお待なさいまート後の方より仲ぞん喜助捕へて些とも動かせぬよ心焦燥て門藏ゲ煙草盆の火入ごと投うつ函は過たず〳〵しケ眉間へハッシと當り流る血ーほよァッとばかり倒るゝ体に驚く人々アレ華魁がと駈寄て介抱するうち廊下より長吉火入を左手よ提げ誰が是を投やァがつた己に何の怨みがあるのだモウ了簡が成ねへからヒッ括つて會所へ引くト敦圉猛く躍り入るにソレ喧嘩よ＋大口の二階も下も大爭動アレヨ〳〵と逃惑ふ女童の聲々ハ潮の湧くケ如くゐて霎時は鳴も止まざりけり白き花は其の姿淡くして俗人の目を樂しまーむるよ足らねと深く之れを味ふ時は興自から顯れて雅韵消爽薬難き趣きあり赤き花は其の色艶かにして塵客の觀を招ゥしむるよ足れども徐かに之れを味ふ時ハ眺自から散じて矯者淫猥厭易きの感あり譬ハ〻婦人の清節なる淡白貞操を主とするが如く赤きは婦人の多情ある濃欵阿媚を呈するが如し永く愛すれば却て親しく久ー く狎るれば却て疎んずるものなり復説紺城前日向守寛朝臣の愛妾染川の方も君の御寵愛淺からずして公達晴千代君を擧げ奉つり御上通りと經上りて威權をさ〳〵夫人と凌ぎ萬心ハ隨意ならぬはあらざるよ其の君寵を辱けなーと思ひて寶を竭しはせで寛朝君御歸國れ後は誰憚かりの闘もなく秋山操と密通して醜聲外に洩れけるを勝朝君は知ゑ給はず渠れが容貌の艶廉よゑて頻りよ媚を送る風情よ木石ならぬ凡人の心の駒の止め難く且暮思ゑ給へども明けてハ夫れと宣はぬを志賀主水が計ひにて人知れず御手許よ愛させ給ふ事もありとか恁まで多情の染川なれば上を見習ふ下態の奥も表も隔なく淫風頻りゐ盛んなれども獨り綾岡のみ捉を守り更よ浮たる氣色なく固よ水野周之助ハ親と親とが約束して公けよまで聞えたる女夫中よハあれども未だ祝言をなさゞればとて之れよさへ親しくは詞と交へー事なくて染川秋山志賀などの舉動よ常よ目を注ぎて正しき明證を得んものをと表は復心の如くよ見せ裏に之れを探り居たるヶ頃ーも六月四日なりけん早魃續きの堪難さよ團扇づかひ

の手も勞れ晴千代君を守りながら子舍れ樣先端居せし染川俄かに女中を呼び御、奥庭なる清風亭は風入もよく渠處よは田舍の態を摸したる小田よ早苗の蒼々と景色も暑氣を拂ふに足るとか若樣唯今那の亭へお成よなれば其斐宇們へ早く那處の掃除として御毛氈をお敷なさい幸ひ今に綾岡どのも御番明から御添伽よお出の筈ゆゑ清風亭で何か趣向も有ませう早く〳〵よ女中輩何と違背もない〳〵は自分も堪ねぬ暑さ避け此仰せはまつ風の下蔭涼しき海衣の裾もそい〳〵出て行く程もあらせず綾岡へ御番下りの勞れも厭はず晴千代君の御伽に伺候するをば待かねて今年三歳に渉らせ給へど穎才敏智の御性質幼きながらも自から仁慈の御詞爽快よ綾岡其方ば能う參つた御番下りで勞れもあらうケ染と一所よ庭へ來いト大人よ增る御仰綾岡ハット頭を下げ能う仰せ遣へされました今少し早う上りませうと存じまーても夫人の御用ケ繁く夫れ故よ上りケ遲う成ましたモシ御部屋樣貴方にもお暑の節朝夕の徙冊づきにて御苦勞よでざりませうト一禮すれば染川も亦會釋して若君誘なひ立出る御庭續きの清風亭小山に喬き松が根よ造り設けー四阿屋の彼方は御庭の泉水よ魚の數々群遊び此方ば蒼田よ結ぶ稻の花風のまよ〳〵散る風情いと眺めある其上に涼風座に袂を吹き暑さをさへも忘るれば晴千代君ハ勇ませ給ひ綾岡池よ魚ケ居る那れ捕れ〳〵ト仰せ給へば染川も亦詞を添へ綾岡との若君の仰せよ隨ひ御池の魚を早う捕てお出なさいトいへども綾岡立かねて其の義は何ぞ他樣へ仰やり付て下さいまー今日は亡父兵馬の忌日齋戒として居ますれも魚を捕るのば佛へ恐れ殊よハ幼い御身とて生たる物の命を召すも不仁の業で御座りまーすれば外よ何とか御慰みと御代逆ひーませうなら綾岡よ取まーても御嬉ーう存じ上ますト固辭に染川肚裏に偖は今猶父の死を綽んで私かお心を配るう是も未々我が爲の障碍となれば何卒ーて除かんものとと尋思なし點頭給ふ若君よは心も止ず膝を進め何う言んとなす折から若君遙かお指し給ひアレ〳〵那處お何者か弓を持つて鳥を射居る彼れも不仁とやらの者ゆゑ早う歸れと申ーて來いト仰せよ染川其方を見て那れハ案山子と申ーまーて鳥威よ百姓が拵へまーた藁の人形鳥を射りは致しませぬ唯今綾岡が申しました是れの親兵馬といふハ文學武術の達人と自ら誇つて居まーたれど詞は其の身の飾り計りで誠實のない案山子武士アレ那の通り嚴めーい造りハ致して居まーたケ役に立ぬ証據よは四年以前の五月四日聚も白晝何者よか討れて往生致ーましたト詞を極めて嘲弄すれば鼻息窺ふ女中輩皆一同に笑

ひけり堪忍強き綾岡も父の謗誹に怫として可しや兵馬が如何程よ武勇拙き者よもせよ晴の勝負で御座りますれバ問客〳〵討れぇ〜ますまいに縱令智勇ょ勝れたとて飛道具にて騙〜

〜撃にせられた者が何でマア堪りませうぅ御部屋様御察し遊ばし下さいまし唯今鳥渡伺がひます

れも案山子武士との御褒詞草葉の蔭で伺つて父も定めー喜びせうァノ案山子ハ百万の鳥が襲ふて來やうとも唯一騎よて弓を張る勇ある上は八方へ綱手と曳き鳴子を付けて敵を自然ょ遠ざくる智ハ凡人の及ばぬまた處弓を張り矢をつゲへて敵ゐ向へと

これを放さず敢て之れを傷げざるハ仁の極意と申ーませうか斯く智仁勇の三德を備へー者に譬へられたは父の僥倖妾の面目難有う存じまするト智辨と振ひて言返せバ染川案よ相違ーて苦々しき事限りなけれど固より學びに疎げれば之と破るよ詞なく頬膨らして控へ居る晴千代君ハ興じ給ひコレ綾岡面白い今の話し其方の父は剛者ぢやのうト仰せまハッと綾岡が能うこそ仰せ下し置れました御嬉ーう存じ上げますト述る折から女中の誰彼畔よ生ひたる草花を種種摘て持來り晴千代君の御前よ差出せば幼君手に取給ひて餘念なく是は何ぢやト問せ給へば染川逐一其の花の名を説明すに花籠やまた綾岡ゲ事よ擬へて憚かる方なき惡口を堪へ〜ー綾岡も重なる誹謗よ我慢も破れ一る草花を御覽の折ァ、モシ若君其の花を御手よゐ取り遊ばしては忌はーう沙汰ま

する夫れは薊と申しましてうち見は至つて美しけれど心の底の意地惡く花よも針を持ますれば葉ハ其の通り棘ばかり元より下賤な草花なれば少しにても貴人の御手よ觸れると增長して御高恩をも打忘れ他の花を破つだりまたあたし男の袂を留めたり良からぬ事がありましても棘ある花ゆゑ引棄るには手を傷めるのよ恐怖れ遠かつて居ますれば益々猖ケ威と振ひ自分よ隨ふ者は負き意よ逆ふ花あれば其の針よて殺すとやら素性もれし知ぬ畔の草必ず御油斷遊ーますなト思ひ切つたる一言よ固より我が身に覺えのある染川腹よ保ちあねモシ綾岡どの聞苦い花よ意もあるまいゐ事々しい今の御意見ソリヤ誰が上でございます容子に依てハ此れ染も聞拾よは致されませんト敦圓問へば綾岡は然もこそあらめと片頬に笑み御部屋樣の其の樣よ御立腹を遊ばすのは一圓合點が參りませぬ惣ーて御奥勤めの者は是等の遲い心懸ねば御抱守も出來ますまい物の序よ申しませうが女は心愚なる故少ーく人に寵愛されると心驕りて昔を忘れ己れか心よ好むを擧げ氣よ逆ふを讒言して退ぞくるは往々あるー慣ひ漢和よも婦人の爲めよ國を減し城を傾け或は下の怨みをひき其を身を危くし給ひたる君も多しと承まはる其の例ーとは幼君よ他なから申上げたは誤りでハ有りますまいト言

拂つたる情態に染川怒り勃然と今折取りたる薊を以て衝と立上れば側なる女中御部屋樣の御手づから御折監では恐れあり詞の過る綾岡を妾ケ折監致しませうト其の花持て立寄つ御前を恐れぬ其もじの御詞御部屋樣ゐ代り申して妾ケ折監お受遊ばせト打たんとする手と捻上げて滅多にさうはされませぬト身を潛まして投出せば小山の下へ滾々乎轉ぶを見るより染川が松の小枝を折取つて慮外であらう綾岡どのト處嫌ハず打擲の笞よ屈せぬ綾岡が打るゝ手元へ身を寄せて妾を一つ打給へば取も直さず若君を鞭ち給ふ道理ぞや君と冊き仰がるゝ甥兵太郎ケ僭上の罪を滅する此の笞思ひの限り打ち給へ歐るこ此の身の痛みより捷つ御身の肉は傷みはせずやト思ひもかけず探り知つたる巧計の始終了得の染川打つ手もひるめば幼けれども晴千代君コレ染何で綾岡を酷いめよ遭せるのぢや打いで濟ぬ事なれを己を代りよ打てよト辨へ知らぬ御身よも自からなる血肉の伯母を憐れむ御仰せ染川益々怒りを加へ大事を知られし上からハ所詮生てハ置れじと思へば笞を取直し綾岡どのは狂氣と見なる狐狸の魅入しか呪ひをーて得させんト情容赦もあらばーーく打据ゑ蹴倒ー捻伏て庭下駄なからよ面部を踏み蹴返す折しも部屋方が唯今奥老志賀主水様御里方ハ秋山様御同

道にて御入りド披露をしほよ染川も笘と捨て座うち拂ひ此の狂人は長局の座敷牢へ押籠て人を側へ寄せぬやう計いれよト命じつゝ若君伴ひ立歸り其儘直に主水們が扣へ一座敷よ立出て一禮未だ終らぬよモシ主水様操殿露顯を致してござりまするト言ふ聲高しと押止め操ハ立て前後の襖右左に開きて坐よ直る主水は猶も四方を看廻し御身が言るゝ大變とハ如何なる事か知らねども先月南町奉行より引渡されたる罪人の彼の堀口門藏ハ昨年小波侶倶に當邸を逐電したるが如何なしてか江戸へ來たり吉原江戸町二丁目の櫻屋とか申す處へ屡〳〵遊興に參りしよ其の敵妓の〳〵しと申す女に深く言交せしは彼の大工の長吉なるよ一然るよ知何なる事よりしてやら門藏大きに立腹し女の眉間に傷けしより遂よ奉行所へ送られたるケ當家ハ藩士と言立たるにゞ則ち引渡されたる處から當斷獄よて尋問するに彼れ物よや狂ひけん恐と譬よも我々ケ謀計を口走り已よ若君晴千代の事とも言んとなせ一故密かに醫者よ賄賂一て熱病なりと言立つ嚴しく牢四よ繫せたれど何時まで斯て在るべきならねば寧その事よ牢より引出一後日の口を留めん爲め斬殺ずの外なしと實ハ操と商量一て御身の意見を聽ん爲め是まで推參致してござるト告るよ染川胸安からず夫にハ思ひ當りまーたは

唯今御庭の清風亭にて彼の綾岡が若君を我が甥なりと申せしゆゑ夫れを打消し長局の座敷牢へ押籠させて必ず渠がいふことを信ぜぬやうよと女中よも申一含めて置まーたが今の仰せを窺ひますれば堀口門藏ケ口より出たる事でせうと言よ主水ハ眉を顰め綾岡事ハ一門たる水野か嫁の事といひ殊ふけ夫人御寵愛の侍女なれど我が儘よ所分も出來ぬ渠が一身所詮門藏を生置てハ此の末如何なる事よなるか其の禍ひを慮られねば今宵のうちよ門藏を牢より密かふ盜み出して御身ケ坐敷の二階へ呼び寄せ委細を吟味一たる上殺すに增したる事あるまじ幸ひ御身を恨みるよーけ斷獄係の口書にも記一てあれば門藏が其の身の罪の脫れぬを知り破牢をなして忍び入り寐首を刺んと主たりまを早くも御身よ認められ斬殺され一者と言ひ做一後日の証據を沒ずるケ差當つての妙策ならんと拙者は存じ居まするト其肺肝を話明せば染川頻よ笑つぼよ入夫にて事が出來まーた夫なら今夜亥の下刻に破牢を致させ伴ひ往くべし其の時渠を土足の儘二階へ伴ひ下されよ如何も忍びし証據よハ足形遺すも一とつの計策主水聢かよ心得たかと尙ホ委細を說諭す手筈を定めて袂を分ち素知らぬ振よ各〳〵詰所をさして歸り行く霄よ聳ゆる雲の峰漸く壓まり一天よ墨汁流す夕立空颯と吹

く風に誘れて降り出す雨に此の頃の暑さを洗ふて徐ろに袂涼しくなる神の音も漸次に遠かる長局の一搆に押籠られし綾岡は無念さ言ん方もなくまた哀しさの限りなく憂てやな結城家は惡人獨り蔓延りて世に頼もしき忠臣ハ御國勝手と命ぜられ今にも知れぬ亂世に便る方なき廣野の荊棘歩めば足を傷けて劔の中に置く此の身縱令ば腹は賤しくとも貴きゆ身に御恙のあらせじとてゆ守るなる晴千代君は現在の兄が襁褓に寄はれし甥兵太郎であらんとは思ひもかけぬ身の果報も肯か永く續くべき惡人們の拵へし事とハ言へど恐ろしい臣下の分にて苟且にも君を凌ぎし身は反逆かとれをてしも此の世にハ産も出しハし給はぬに如何なればてそ斯までに小幡の家にハ神佛の惡ませ給ふか哀しやと言ふに言れぬ憂き懷ひ所詮此の儘過しても如何なる變のあらんも知れじ女の腕の細くとも御家と思ふ一心に先づ染川の首を刎れ晴千代君を綁縛て御前に事の次第を訴へ此れ身の罪を待よりは外に尋思もあらしの後晴て靜かに治ちばこれに上越す忠義ハあるまじ然ぢや〜と健氣にも決心してハ肯て動かゆ凝固まりし鐵石心に更闘るをゆ待かねて密かゆ牢を忍び出で身を放さゆる守護刀の目釘を湿めし窺ひ寄る風庭近き染川が二階の闇に未だ臥さずや燈火明く怪しくも男の

姿のうつりて居れば這は折惡しと綾岡が屏所に忍ぶ間もなく俄かに二階の騒がしくアッと魂切る聲のして障子を染むる韓紅是れいと驚き見上る折染川悲しき聲を上げ狼籍者が入りまして出合なされ〜と叫ぶ聲音に御輿の騒動雪洞照し長刀小太刀思ひ〜に携へて出合ふ綾岡度を失ひ如何ハせんと躊躇し此の結句ハ其塵かあらん跡たねて淺茅がすゑとなりふけりと詠めりし古歌さへ思へひ出す草に音ゆ鳴く鈴虫のあはれはかりは通ふなる下總國豐田郡川尻村の偏邊りに此頃新に設けしものか世を忍ふべき白屋の最と物數寄なる一搆へあり草の門深くたて籠し要樹の牛垣廣々と野をかたどりし庭の面眺望えつや〜尠からねゆ訪ふ人絶てなつゆ過ぎ秋の初季の魂祭り軒に吊せし高燈籠は富たる人の萬燈よゆ優る心の一燈か路の栞を得る旅人は眞如實相の明月に迷ひの雲を拂ふが如く最ゆ便りある事なるべき近き頃まで此の家には年齢廿四五の一個の女が六七歳の娘を守りて下男と炊婢一人を使ひ居たるが去年の暮より夫婦の者が十二三なる娘を伴れて同居なしつゝ下男と炊婢も今は居ずなりにけり此の主個を誰かゆ問ふに結城の愛妾花藤にて娘といへるハ寛朝君の御胤なる昭姫君にて在するゆ曩に金時綱五郎は小幡左源太の兵馬を尋ね始めて夫れと聞しよ

り同居せんも恐れありとて結城の領内川尻へ目立ぬやうよ家を繕へ花籬の方を移ー遣り萬一の事のあらん時の爲にもなれと我が弟よ女房を隨へ附け置つまた自らも七日毎よ必ず尋ね行きたるが歸參の愜ひー小幡兵馬は密かよ是等の事の由を寛朝君に聞き上げて寃抂の事は明めたれど今更急に召ー給ひてハ江戸表への聞えもあれば密かよ御扶持あること宜けれぺ申ー上げーを聞し召されて其の御内沙汰あり去かば之れを

彼方へ通せんと夜舟を雇ふて鬼怒川を下る窪田の堤下にて女の投身を救ひ上げしよ既よ綽切れたる後なれば如何はせんと看るや面は疑ふ方なき染川が召使ひの小波なれば兵馬は大よ驚きて此奴何等の所以を以て此處より投身ーたりーぞ息さへあれば奸曲の證據を充分得つべきよと口惜折しも堤上より船を呼ぶ聲聞ゆるよ必定小波を追蒐來ー者にそあらんと思ひてければ岸邊よ舟を寄さして乗れよと言ふを待詫ー氣に急ぎ三人の男女の者船に移りて顔見合せヤ左源太様。オヽ田中かと互ひに交す詞さへ憚りあらぬ船の中從來在りよし事どもを告つ語りて倶侶に奇遇を感じて止まざりけるが小波が死骸よ懷中の其の儘あるに田中仁平は早くも眼を注ぎつヽ先づ夾嚢と取り出たー死骸は船子よ吩咐けて再び川へ投じけり恁而其の明近き頃船は川尻の岸よ着ー兵馬ハ田中夫婦娘を相伴なふて花藤が隱家へと尋ね行き絶て久しき面會より互ひよ恙なきと祝し又仁平們の事を說き次に殿の仰せと通じて照姫君よも改めて拜謁を願ひたろ上若し折を得ば汚親子の汚對面あるやうに拙者身よ代へ計ふべし御痛はーくハ候へども時の至ひを得たせ給へと慰め申さて別れに臨み田中一家の者を留めて御冊づきの役よ充て且綱五郎の女房弟よ深く實誼と謝ーたるのち身の暇を取せつヽ軈て結城へ歸りけり個は這れ慶應二年九月下旬の事よなし爾る程に花藤も再ひ生て相見んとハ思ひもかけぬ姉妹や兄嫂よも姪よも會ひ喜び何に譬へんものなく勇むよつけて照姫君の汚痛ハしさよまた誘ふ袖の時雨は露と散る浮茅ヶ末の白屋を金殿玉樓の御邸よ代て冊く其の身さへ賤が手業の仁田山紬袴襠に代へたる此の袮あハれと他所よ北山風ハこヽの軒にも通ふものを歸り來よとの汚仰せはまなびてや斯くも遲きぞやと彼方の空のみ仰き見つ結城戀しと朝な夕な懷ひの絶えぬ時そなれ心のうちよそ哀れなれ待間もはやき歳の瀬は流れ〳〵て慶應も今三年の中央を過き七月中の三日となりぬ花藤の方は兵太郎の菩提をかねて先代兵馬の魂祭りをなさばやと軒には切子の燈籠を燈して冥席の路を照ー門よは供への高燈籠心えかりの吊營み照姫君はお鶴と伽よ庭の草花折り取りて佛よ向給ひつヽ餘念もなくて在ーます折もてそあれ此の村の走りと見ゑー一人の男門より高壁はり上げて此方の内の仁平どの代官様から急用だ早くお出なされませ早く〳〵ト音あふよ一家の者は打驚き安さ心もあらざりけり是よて仁平は肩を寄せ左右なく起も上らねばお勝は最ど氣遣ーく代官所よりの呼出しとハ心がゝりな今の身の上モシ牢破りの詮議厳しく夫婦の者ケ

此の處へ潜れて居ると注進をしたものあつての御詮議なるか何れよしてもコレ我ケ天晴り
いふて往かぬやう工夫を付けて下さいまし ト言へば側より花藤も今日ヨ限つて里人が尋ね
て來るのも不審し心ねぢけー山口ば江戸詰となり此の春に上府をしたとハ聞たれど計り知
れぬは人心兄さん何ぞ往かずとも事の濟むやう分別をーて下さい ト右左り留むる妻と妹と
か面を目護て田中仁平女心ヨ案じるは更々無理とハ思ねど一度掟を侵したのみか牢と
破つて逃たる拙者所詮天命全うーて世を終らんとハ思ひも寄らねば妹の無事な顔と見て姫
君様をも拜せー上は最早死しても口惜からず殊ヨ若殿御隠居の後御國表は善人のみ在する
なれば自から民百姓を憐み給ひ寵も漸次ヨ賑ふとぞ望みハ既ヨ足りたるものを何時まで刑
餘の人となり浮世を挾めて送らんやゐ花い今ぞ大事の宴なる能く心を用ゐ給へお勝和女は
お鶴を育て側ら便なき姫君の御冊きを息るなよお鶴ヒ冊や伯母様の言るゝ事を聞分けて必
ず世話を燒せるな又會ふ事も難ければ名殘惜くは思へども使卒を何時までか待せて歎き
に堪をうつさん然ばとばかりに身づくろひーて急がはしくも走り出る跡追かくる娘のお鶴
を叱り退けつゝ門の戸締切り臧にお待せ申ーましたィザ御案内下されよト言へ使卒ハ欠伸

をーて先ヨ立たる野中の畝道彼方此方と夏草と踏分けて行く裳さへ最と靄けき夕闇幕魂迎
へする麻殼の火の果敢なき者は命ぞと思ひヨ沈む人よりも見送る跡の女同志もろき涕を拭
ひも敢へず心手向の孟闌盆會搗ヨ切子の燈籠も此の世からなる菩提の種になれとて燈しハ
せぬものと憂たての世やト花藤が哭けばお勝も袂をしぼり定めなき世の常とはいへど頼り
ゐ思ふ兄弟は惡人倆ヨ與隨ひ皆其の終りを全うせず心正ーき我が夫ハ人の爲めとて何時
からぬ身を持ちなごら居所ヨ行く後ヨ殘りし女房子ハ何を憑めに暮すべき察してたべとう
ち歎くに花藤彌々遣る方なく夫も我が身が懇に江戸に往くすば我が君の御情受ける事もな
し受けすば一家睦しう斯る騒ぎもあるまいヨ死んでよい身ハ存命て兄上二人を亡ふのも元
を正せば此の花ゆゑ思へば來世が恐ろーいト我れを忘れてワッと泣く二人か心と幼な氣に
酌知り給ふ照姫君坐ヨ浮ぶ御涙を人ヨ見せじと抱包みコレお勝モウ日が暮る向ふの村でハ
燈籠へ皆灯を點して沙迎火を焚くやら烟が見えるゆゑ此方も表の燈籠へ灯を點ーて呉れ淋
しいト袖ひを交らす沙詞にアイと返辭はしながらも霞む目元ゐ立かねて躊躇ふ側より娘の
ゐ鶴アレ彼のやうヨ姫様が仰せ遊ばすモシ冊様早う黙ーて差上てよ妾も切子を點ーませう

ト口には健氣よいふ間暮暗きよ向て泣顔を見せぬ娘の怜悧さに彌せぐり來る涙川堤も切る
と如くよて柝ゐ袂と絞りつゝ門の擂端の燈籠わうつす灯さへも影朧く哀れと迎ふ迎火にう
ち合す手は良夫の方涙ゐしめる遂生よ集く蟲なで倶音に泣く桐の一葉に驚かされまた音を
止る秋の野のあばれは此に留めけり折しもあれ今宿の方より路踏迷ひし人々にや陣笠深く
面を覆ひ筒袖羽織に野袴の裳よ露を拂ハせつ金造の太刀を佩き節最と繁き竹の根の鞭を
片手よ豊よ歩めば後よ隨ふ一人の壯士ひだある上衣帯革も締括りある洋服打扮白布を以て
柄を卷たる刀を脊よ吊下げて籏を持つゝ隨ひ來る後よは迫子の五六人仁平を圍みて警固な
しひさ添ひ近く此の家の表門に吊せし高燈籠をーるべに卿の戸うち叩き是は野がけよ立出
たる近き邊の武士なり思ハず廣野よ往き暮て勞れと憩むる方もなく甚だ難義よ及ぶそかし
情に霎時休憩させ湯を一椀振まひ呉よトさも應揚よ音なへばお勝ハ耳にもかけずして此の
家は少し取込みありて人を憩まず事ならず是より四五丁行き給へば川尻村の入口よて此よ
は茶店も點あるなり彼方と訪はせ給へかート賤心なく言放てべ這は情なき婦人かな歩み勞
れて一足も進みかねたる者なるを霎時憩はせたればとて何條障のあるべきそ曲て休息致さ

せよト猶うち叩く卿の戸を裏より開きて綱五郎恭々ーくも一禮なー主人は非歎よ呉るる事
あり斯く情なく申せども某生引き受け御休息を致させ申し奉つらんィザ御入あるべしと思
ひ入つてぞ述よけるる斯とは知らぬ女房ゐ勝はォヽ銚子屋の乾盃さん何時の間よマァお出で
ーた宿の仁平の事に就て種々貴下よ御相談申ー上たい事もあれば其のお方をも斷つて奥へ
お出下さいましト表よ心かねてより謀し合せー事ぞとは知らぬお勝に一禮ーて何の話か知
らねども後よ徐々伺ひませうゲ先づ差當り此のお客端近よては裏れもあり奥座敷の掃除
をして御茶の準備を早くう萬事ハ私が胸よあるハテ心配をさッーやるナト仇う容子ハー
ら張の燈籠の灯をかき立てお勝は奥へ入相のかねて今宵は我ゲ君よ會まつきとは聞えても
姿ゑ振ゑ鄙びつゝ在ーに變な身の廻りまた今更よ眞白みて出もかねたる花簪が雪洞片手よ
手を突へ唯今は賜の女の最はしたなく聞おまつりて嚏がし腹も立せられけん裾はす如き
白屋よて進ちする物あらねども緩々憩せ給ふびきィザ案内仕まつらんト小腰を屈めて先
よ立ち座敷へ二人を請じけり迫子は其の儘綱五郎が案内よつれて厨の方へ仁平を伴ひ廻り
行く程もあらせず花簪は照姫君ゐ茶を持せ自ら菓子を持出て上坐の客よ進らすれば照姫君

は目早くも附添ふ人よ目を止てヤ、其方は小幡兵馬珍しい今日はまた何用あつて來て呉た
仁平の事は存ぜぬかト問はせ給ふに花籬ハ御痛まーや父君は現在側よ在ませども知し召さ
れねバ他人と思し召たる那の汚詞と口よは明げて言バえよ言で止むる蟲そゃろ泣く音や
洩れよけん兵馬ハ遙かに座を退りハヽ難有さ古今の仰せ今ハ何をう包み申さん去年の九月
見參よ入りたる時にも申せし如く折を見合せ汚親子の汚對面を致させ本らんと夙夜心を碎

きーかと公私ハ用の繁ければ其の折を得ず候ひーゐ一昨日より此の遠よ野院と設けて調練
の企てあれば父君よ勸めまるらせ忍びやかよ汚入わるやう取定め則ち事ハ趣きい花籬どれ
まで畜ー入れ綱五郎よも其由を申し通じて置つれども若ー此の事の洩聞えては江戸表より
汚汰沙よなりて如何なる難義のあらんも知れじと思ひ慮りて貴姫よも田中夫茅の疑よさく

更に沙汰を致さゞりしが事今日よ及びては仁平と一先召寄て申ー聞する義もあれば夫ゆゑ代官の名と仮て召出ーつゝ綷の心と含めさせたる其の上に浮東道べを仕つらせ容易てゝへは參りーなり則ち之れよ在するが姫君様の父君よて今の浮名ハ賢之助朝寛朝臣に在ますぞや浮側近く進ませ給ひて六年已過父君はと尋ね幕せ給ひつる浮物語をなさせ給へいで花藤どの誘ひ進らせ足下も過し頃よりの苦心を忘れ給へやト突遣られては了得よも恥しさのみ先立て捗々しうは見えやらず寛朝朝臣は照姫君の顕に手と懸けうち見給ひコレ照とやらん能く聽よ余愚よーて染川が色よ迷ひ言を信じて雪よと清き花藤を姦通せーと思ひ誤り兄誠因を手に懸て怒りよ乗じ花藤を獄司の手に下せしが猶も飽すや染川が手を廻して花藤と奪ひ去らせし其の夜の程よ綱五郎とやら申す者の侠氣よ依り救ハれて和子と擧げし趣さは兵馬が話ーよ逐一聞知り會見たくい思へども折のなくて過つるぞよ斯く恨ある余あから親と思ひて幕ひーとや蟲れ氣もなく六歳兒よは優見りのする此の成長能う顔見せよト兩眼に浮涙を浮べ給へと花藤今い得も堪ねて其の浮言よ此れ頃の苦勞も忘られて嬉えさゐ就ても増さる悲しさば苟且ならぬ結城家の姫君様を我が子らーう如何人目と忍べはとて照よ〳〵と

呼棄よ育申せー恐ろしさよ若し浮殿よて在るならば多くの女中よ冊あれ浮手車にて朝夕の浮慰みもあるべきよ殖生の小家の詫住居里の童子と友として草苅業や鋤鍬の賤しき手ぶりを戯れに遊ばす事を見る毎に止め申せど冊きの人もなければ駈歩き世帯事して背戸遊び是ケ結城の姫君の浮戯れかと思ふ度胸まで涙の衝うけても明て夫とはいは橘の夜な〳〵毎よ居住ひの行儀作法ハ浮教授を申し上げたる幼氣よ開分給ふ浮怜悧さト言も盡さずワット泣く次の一間よ洩れ聞く仁平お勝お鶴も殿の慈悲花藤どのが誠心を聞けも聽くほどせぐり來る涙の袖と咬ーめて泣じとすれば生僧よ咬の洩るるぞ是非もなき兵馬は歎きを止めんと壓いり上げて次に向よ誰かある準備の酒盞銚子殺を取揃へ疾々之れへト命ずるよ心得たりト綱五郎仁平們親子と慰さめて品いなけれど心のみ祝ふ酒宴の取肴恭々ーくも持出つ精進なゲら更めて御親子の縁結びの土器猶綱五郎仁平們よも御流れと酌ませ給ひ自然に憂をかぎ拂ふ玉の箒の數ぞ増す樽の切子は此の君を迎への灯とふり變る千種の蟲も自から千代を壽ぎ謠ふに似て忽ち色も深卿や庵の窓も翠ーて御簾を擬ふ如くなり慶應四年正月七日結城家れ家例とて苗字帶刀を許可されたる鄉士里正の年賀を受け給ふ是より先田中仁平ハ小

幡兵馬ヶ執成にて寛朝君にも見參に入り罪を得たる始めより破牢をなーて照姫君の御冊きをなー進らせたるまで事遺漏もなく聞き上れば寛朝君も志賀山口の計ひ不法の極まりなりと思ー給へば其儘ゐ仁平を俱して御歸城あり則ち一門水野隼人ハ今御在所の政事と統行ふ職分なるより仔細と之れよ通じ給ひて再び尋問ありければ仁平ハ憚る處もなく事の基を言上し猶後日の證據として小波が懷中より取得たる鼻紙嚢の内よりー密書の類を差上ーが此の内よハ隱語を以て若君の御身の上よ係はる事のありけれども正しく夫れそと認むべき事もあらねば後日の爲め水野ハ深く秘置けるとそ爾れば仁平の罪科ハ罪よーて罪よあらず唯破牢の一段ハ掟を破るよ似たれど野中よ獄を造り設けてこれに罪人を入れ置く事ハ未た其の例なき事なれば此と以て一概に破牢とハ見做難き處ありとて件の趣ぎをかい認め仁平ハ更ゐ川尻村の里正となして苗字帶刀免許ありたしと案文を添へ江戸表へ伺がひけるが主水藤九郎們ハ口と揃へて罪ある者ぞと言立ーかども小出太田們の老臣ハ隼人の詞を理なりとーて偏よ賞罰判然せんとを執成て願ひーかば則ち滕朝君の御沙汰とーて此の事更よ差許されたり之よ仍て田中仁平ハ恭々しく事受しつ辭て川尻へ赴きーかば己れは元の庄屋家作を其の儘に購ひ取り廣き舍園のあるゐ任せて之れへ美々しき乾淨房を最も手廣建設けゐ私かよ照姫花蘚の二方さまを迎へうつして厚く崇め冊きげり舊談休題單表田中仁平は古例よ依り年賀を申し上げんとて獻上物を小厠よ持たせ結城寺よはせ參りて見參式の如く濟ける歸るさ水野隼人小幡兵馬の兩家へ祝詞を申し入れ伴人を此處より返して自ら小森に赴きつ交代したる新庄屋にも會て口誼を述ばやと一人和風を袂に含め小森に通ふ松並木を裕かよ歩む其折から本街道の方よりーて此方よ急ぐ一個の飛脚葦駄天走りに飛が如く駈け來りつと懷ハすも仁平よ確と往當り蹣跚なから踏止まり圓な眼を睜つゝヤイ道側の道祖神メ至急な御用で道を急ぐ此の御飛脚の御通りよ道を避ぬゝ不埒な奴だイヤ此奴は二本ざーだナ竟よ見慣ぬ侍士だが大方結城の御家中ではないだらうと鑑定ーた己の眼よ違へはあるめへゐ、さうだとも〳〵今日ハ正月八日だナ御儀式仕舞の庄屋の年禮貴樣も執れ庄屋だらう一体何處の何といふ此者方事は勿體なくも今江戸邸よ並びのない志賀主水の使卒樫田十三といふ徒士だぞよ此度姿を窶しての飛脚に就ては一朝に說盡されぬ曰くのある事夫れ何でも搆ハねへがナズ此方よ衝突つて唯一言も挨拶せぬ大地へ手を突き誤り入れト威丈高なる

櫛田の暴言仁平は忽ち尋思をして這奴若し結城へ行くならば此方へ來べき道理なし必ず此處等より黨類ありて密意を通ずる者ならん要よそあれと思ひてければ更に驚く色もなく足下の方から衝突つて誤りもせず逆捻よ理屈と言ふとい不當千萬足下も兩刀挾む身の上某子とても同じ事上より帶刀御免の身なれば言ば互ひの粗忽ならずや角面立てい足下こそ大事の場用が手間取て却て不爲に相成るらめ疾く往給へト言懇ぜば櫛田は大きに憑はりて夫れと手前よ指揮を受けうぞ馬鹿な譫語吐かぬがいと何ても手前ケ誤らねへなら刀の手前斯しト旅刀拔て切て蒐るよ仁平は彼方此方遣交はし空をうちせたて其の手を捉力よ任せて捻伏せつ左手と伸して油紙包の書狀の箱を取り上げつ封を解かんとする程よ右手の力の綫みしやらん櫛田はヤッと聲をかけまた身搆へーて斫て蒐るに仁平も只得其の箱よて受留めつふかけ向へぞ未だ太刀を拔かんとはせず充分敵を勞らせて生口よせば仇事をう得る事あらんも計られずと思へば態と四五十步退き走るを追訝めてまた斫付くる太刀風よ音を立つて側ある稻叢押分け半身を顯はしながら此の勝負を目かれもなさで覗ひ居るは是れ觀應院玄道なり登時法印玄道い使ひの類を誰かと見るに先よ主水の惡事に與し折々邸へ出入し折見

知越しなる十三なれば驚く事大方ならず我れ一度い主水們の腹心となり身よ餘る榮耀榮華を極めしかど小幡の一子を奪ひ取り染川殿の御腹よ誕生ありし若君と僞り事の成就してより左右に事の漏んを恐れて現在御部屋の實父たる牛若松を殺せし上吉川始め女房のお留も非道の刄ゐ殪れ皆其の終りを善くせねば禍害必す此の身の上よ及ばん事を思量りて逃くも江戸を立退つ在所の寺へい得も入らで其處よ此處よと廻り新禱よ辛くも鼻下の食殿に供物い上げても酒一滴飲む事ならぬ今日此頃正月去まから護摩檀の烟に燻ぶり居るといふい餘り景氣が惡過るを思ふ矢先へ十三が必死を救つて仁平めの首うち取つて差出しなば疑ひ深い主水殿とて豈夫殺しいなさるまい呪收も知らぬ山伏で世を誑摩化して渡らうより明日よも知らぬ亂世い武士よ勝たるものぞなぎ右にも左にも主水殿よ御髭の塵を掃つた上彌陀の利劍の二本差此の物髮を髷よ結ひ兩若黨でも伴よしやうかと服裏よて語り合ひ戒刀スッリと拔持て竊かよ隙を窺ふに仁平は櫛田を思ふ儘勞つせつ、も蒐と寄りて首筋取らんと猿臂を伸ばせど櫛田い驚き刀と引き近づかせじとて打振々々禦ぐよ仁平も氣を焦操て刀を拔くに玄道は此ぞ大事と思ふにぞ聲をも懸けず横合より突然斫て衝れども仁平は騷がず身を

換してヤ、其方ハ藤太郎悪事を悔て死よ來たのかト罵る仁平を、醫を覗み胡蘆摺里正の出師

者小間言吐がさず首を遮與せ己が出世の手蔓にする。何を小癪な其の一言身不肖なれど田中仁平腰ゑ兩刀挾むからえ爾等如き似非山伏ゑ阿客々々討る、者ならんや惡に與せ一妻の兄親類甲斐を非人ゑ渡さぬ慈悲と拜して誅を受けよト罵りあへず切結ぶ隙を窺ひ楠田十三書函を奪ひて遁んとすれと闘ひながらも田中仁平ハ狀箱聢と踏止めたれば遁るもならぬ此の場合觀應院ゐ怪我あらせじと猶懲ずまに斫て蒐るを仁平は見るより面倒なりとて一足下つて體を轉し片手なぐりに振下す刀の下ゑ十三か首と胴との暇乞ひパッと立たる血烟とゝもに冥土へ飛脚の使ひ首ハ遙かの田に埋り骸ばかりは手足を張り平張伏ーて死んでけり之れを見るよりハ玄道は江戸表よりの御使と討も殺せし大罪人覺悟ひろげト斫り付ると仁平ハ遙くも身を潛さー丁と當たる柔法の秘術ゥムとばかりゑ仰反て大地ゑ撞と仆るれバ仁平は血刀押拭ひ鞘に納めて塵うち拂ひ以前の狀函取り上げて聢と懷中したる上刀提緒をとく〳〵も觀應院を葬と縛綁活と入るれバ玄道は眼を睜り面を皺め前後を看廻〳〵てエヽ口惜や一討を思ひし力ケ入り過て我のら仆れ株ゑて脇腹を強くうちたる故氣絶をなーて阿容〳〵と生捕れしかト不減口仁平は莞爾と頬笑みて天罰思ひ知つたるか淺猿き身となつたも皆な之れ手前が心拵今更卑怯未練よも隱ー立せず奉行所にて一伍一什を招丁せよイザ立て歩めト縄取り詰め引立られて只得も觀應院は阿容〳〵と結城寺へぞ拘引行く惡の報ひを如何せん爾る程に田中仁平ハ觀應院を引立て結城寺へ赴きつ奉行所に行かんとする途次圖らず小幡兵馬に會ひぬ小幡ハ日早く夫れと見て綜の元を尋ぬれば仁平は詳さに子細を語り件の書函を差出すを小幡は把て受納め心に思ふよーやありけん下部一人を仁平ゑ添へ先づ罪人を廳へ送り自分ハ其の儘足を速め城内さーて赴きけりさて其の翌る日廳を開き仁平が申ー口を取りたる後觀應院を詰問するゑ聊かたりとも實を吐ねば手嚴く拷問ずる程ゑ其の答ゑや堪えざりけん漸くに口を開きて染川ケ身の上より花籠の方を遠ざけんとて修法をしたる一伍一什また仁平の强訴を認めて之れを弟に通ぜー事秘かに染川が頼みと受けて左源太を除かんと計りしも其の事成就すべくもあらねば遂ゑ一子兵太郎を奪ひ花籠の裏に乳母と二人を忍ばせて邸へ引入れ御世繼に立たる事主水疑心深く牛若松五郎女房ゐ留并に吉川貞信を殺させたるより身を脱れー事總て自分の關係ー事は落もあらず申せーかば皆々始めて之れを覺り驚く事大方ならねど公ゑ刑ゑ處せを逆人詮議の妨害とて獄の裏にて人知れ

ず刑罰よ處たりとぞ人心の同じからぬは今更言いんも事故よたれと親と稱へれ子と稱ふ中よて聢も忠義の見解を異よするより敵となり身方と分れて鑢を削るは亂れたる世の慨ひとはいへ又歎かはしき事ならずや茲に德川十五代將軍内大臣慶喜公は諸藩の徵士が勸めを容れ世の形勢よ眼を注ぎて二百餘年の覇業を棄て日本弓矢の統領たる大將軍の印授を解き大政權を朝廷へ奉還ありて幾程もなく大坂城へ移られーが會桑高松の三藩を始め譜代の諸侯旗下の殿原之れぞ薩賊の政權を掌握なさんず下心よ二葉にーて芟ちざれぺ遂よは斧を用うるの悔あり唯一揉に攻滅ーて後の孽を除かんころ今の最大急務なれとて今年正月三日の拂曉瀧川播摩守をして竊よ討薩の表を上つらしめ會津桑名を先鋒として三軍總勢三萬餘騎勇氣凛々と押出し伏見よ達せし折しもあれ薩の番兵之れを遮り忽ち淀の川筋よ修羅闘場を現出ーたるも官軍勢ひ鋭くして終よ敗軍ーたりけ王然るからよ結城家よての御先祖より德川家に御由緒ある家柄なれば公武孰れに御身方を爲すべきやとの議論起り密りよ近藩の摸樣と探るなぞ其の狼狽言ん方なー志賀主水ハ去年の暮年來の勤功なりとて家老格に昇進ー其の名も茂野喜内と改め軍奉行を命ぜられーっぱ尊王佐幕の事に就てハ專ら威權を有するよそ此の機を辛ひ主家を什ー日頃の望を達せんと今まで家政よ與さわらざる一門水野又兵衛ゐ事の心を通じつ、幕士古屋作左衛門大鳥圭介等よ欵を通じ頻りゐ佐幕の説をなー勝朝君を説勸むるよ勝朝君は豫てより佐幕の心を抱ゐるれば又兵衛始め主水の喜内が説を喜び納れられて一藩中を召集め各自思ふ所と語れと親しく諮問し給ひしに素より一個の異論者なく全く藩論となりよけり時よ三月廿九日大總督宮有栖川殿下ハ駿府城へ着陣ー給ひ先鋒の參謀西郷吉之助は藤澤驛を發足して巳よ品川へ着すと聞ゐ東山道の總督なる岩倉侍從は勝沼を破つて將よ板橋へ着陣せんとするよしにて大鳥古屋ハ江戸を脱し下總地方を、身方となー花々ーき一戰ーて敵と卻けんと謀りしかば茂野喜内(志賀主水)ハ君命を帶び秋山操と隨へて結城寺へぞ赴きける此の事早く注進あつて小幡兵馬ハ承知せしより急ぎ在所の士を集め尊王佐幕孰れをか今の大義と思はるゝやと尋ね問へども誰あつて尊王説を出す者あらねば兵馬い大きよ壁と勵まし諸君は何て大義ゐ迂きや頼朝平氏を西海よ滅し其の勢ひの餘よ乘じて六十餘州總追捕使となり幕府を鎌倉よ開きしよし北條足利織田豐臣御當家德川よ至るまで政事は將軍よ出で天子いあれどもなきが如し抑も我ケ邦の國體ハ萬世一系

變らせ給はぬ天皇の御國よて皇統
連綿と稜威を垂れられ臣下の私ーす
べきに非ぬを德川氏恣ほゝよ政權を
右左ーて外異國と交りを結ぶに更ゐ
勅許を得たる事なく屢々聖意に反き
奉るは是れ違勅の罪人ならずや然る
と諸君は忠といひ義といふ道を知り
ながら三百年の恩を知つて三千年の
恩を知らず幕府を佐けて一天下の君
とし仰ぐ天皇に弓をひく逆賊にな
れとハ進め給ふぞや君は天子の外に
はなし君を除いて何者に忠を盡さん
とハし給ふぞ義は私ーのものよあら

ず惑ひを取りて後悔あるなとゐ憚色
なく述ければ皆々
夢の覺たる如く此
の慷慨の一言に感
されてや一同に唯
今閣下が御說を聞
き數年の迷ひも茲
に晴たり宜ーく朝
廷の干城となり命
を盡ーて勤むべー
猶說あらば聞せ給
ヘト異口同音よ誓
ひたり兵馬は之れ

を聽くと均しく莞爾として笑を含み能くぞ決心し給ひたる然らば今こそ申すべし實は水野又左衛門茂野喜内們國を賣て既に賊と結びたれば官軍こそ押寄て罪を問ふこと近きよあるべし然れも結城の御家名も是と限と成果るは臣たる者の喜んで爲す業としも思はれず仍て兵馬は君を說て勝朝君を廢し奉り寛朝君と立奉り賊の襲ひ來らぬ前御在所のみに勤王の正義を守つて對戰せんと早くも覺期を極めたり此の義は如何と演ずれば誰一人として非を言ふ者なく然るべくとぞ同じける折しも取次の屬來りて唯今江戸表より茂野喜内秋山操御隱居より御用ありて内入ありと披露あり並居る人々は小幡が先見毫違はぬを只管感じ驚きける間もなく茂野秋山の二人に対づ〳〵打通り寛朝君の御座ちかく平伏なし慇懃に勝朝君の既より早や佐幕に決心したまふ事ども最と嚴重より披露なしさてまた並居る諸士より向ひ方々も此旨を心得られよと說諭すに左ありそあらんと待構へし兵馬はこれを聞き敢へず此は心得ぬ仰せかな今もいまとて方々に拙者が陳述致せしなるが抑ろも此度の變たるや決して一朝の事に非ず幕府政權を恣まこよして朝廷はあれどもなきが如くより見做し屢々聖意より反き奉り一積惡忽地報ひ來て目前滅亡の期來れるに即はち天の憎しみよて遂より免かれ難かるべし去

るを貴所等思慮淺くも此の道理を悟らずして無道より組し朝敵と喚ばれ給はん淺ましさよ我〳〵に又た飽までも王家へ勤むる存慮よて今よも幕士古屋等の此の領内へ入らんよは迎へ戰ひ賊兵打靡かさん結構なれば貴殿も今より惑ひを解き佐幕を捨て勤王の大義より伏し給ふ樣御上府あつて大殿をお諫めあれと爽然より詞を盡して述ぶれども彼方も名より負ふ曲漢なれば容易より屈服する色なく一々これより詞を返し爭論時を移せしが遂に茂野は念怒より堪ず席破つて立上り三百年の恩誼を忘れ幕府より抗敵人非人に最と憚かりある事なれど寛朝君とに主とは云はさぬ此の城諸共討取つて幕府へ忠と盡さんに其時悔み給ふなと心の儘に罵りつつ秋山諸共あら〳〵く疊を蹴立て立飯れば須破一大事と口よりそ言ねど諸士に顏見合せ色と失ふ其中に兵馬は獨り自若として少しも動ずる氣色なく事茲に及ぶ上は片時も疾く合戰の準備なくては叶ふまじ左はいへ御親子東西よかけ隔りて敵となり味方と呼ばれ怨恨を搆へ互ひに鋤を削ちん事武門の意地とはいへながら實より憂はしき事なりかしと嘆息すれば寛朝君實よも兵馬のいふ如く予も本意よあらねども治承のむかし義朝が父爲義より弓を牽たる例しも既にあるなれば今更ら躊躇すべきかは早々軍備を整へて敵の來るを備ふべし左いさ

りなゞら子の身として親よ戰爭を挑まんは、罪最と深き事なれば堅く部下を戒めて猥りよ手を動さゞる樣注意するこそ肝要なりと天性至孝の君なれば猛き中よも情ある詞よハッと一同ハ頭を下げて畏こまり其日直ちゐ軍令を家中へ殘らず觸示し兵馬を初め水野等は持場〳〵へ詰切りて追手搦手の備へ嚴重に守衛なーてゞ居たりけり夫は偖置き茲にまた茂野秋山の兩人は直さま江戸へ立歸り勝朝君の御前よ出で兵馬に一味の人々ゲいひつる儘を言上ー且又已れゲ宿意を以て兵馬を痛く讒訴なし寛朝君よあるとなきと口よ任せて誣ければ勝朝君烈火の如く憤らせ給ひ憎くき彼等が擧動かないで此上ハ一刻も早く結城へ押寄せて彼の輩を追拂はんと即夜在府の士を集めて軍議を定め隊伍をとゝのへ明くるを待たで茂野喜內ハ秋山操と先鋒よ自ら全軍よ將として勝朝君と守獲なしつ結城の城へと馳向ひぬ頃も卑月の中旬よて池の眞菰ハ生繁りむらさき匂ふ燕子花の花も盛りよ咲出でつ明望もふか死築山を一眼に見晴す奥書院よ寛朝君ハ諸士を集めて勞を慰らふ酒宴の最中耳使の侍士馳せ來りて庭前よ大息咄き詞せはしく申しけるハ只今敵軍領內に打入たりと覺しくて市中騷々しくひへ〳〵今宵ハ必定此の城へ押寄すること疑ひなし何れも出陣の御準備あつて然るべし

と申ー捨て出行くにぞ時こそ來れと名自が勇氣面よ顯はれて卒と許りよ立んとすると兵馬ハ暫しと押止め一味の兵士皆な一騎當千のものなりと雖ども未だ小勢といひ馬物の具の用意も完たからねは未だ充分の勝算あるといふあらず殊に押手は大軍あれば決ーて之を悔どるべからず云ふまでハなき事なれど猥りに自己が勇よ誇り城より出て戰ふなどは兵家さものこ最も慎むべきことなれも孰れも其の意して決ーて惱まり給ふなと最と懇切よ說諭せば數十の勇士猛卒も唯々と答へて退きぬ斯て其日も入相の鐘ハ無常の時をうつ陣營〳〵の篝火も物の憐れを示すよ似て腸を斷つ夜禽の聲間なく時あく聞ゑければ平馬ハ城の高樓よ一二の武士を從がへて押手の樣子と見て居たるが偶と心づきていふ樣はおの〳〵あれと聞れしか先刻よりーて傍りの古木よ忌はしき木兎の屢鳴くハ合點の行ぬ事どもなり各々も知らるゝ如く夜禽屢々啼くときは其日の戰爭利あらずとかや然れば今宵の合戰も味方の不覺となる凶兆よや何よしても心惡りの事也かしといふ言の葉も終らぬよ東北よ方つて一聲高くずどんと響く合圖の狼火忽地天に溯ぼりて白晝の如く輝やきけれは森に栖をもとめたる數百の白鷺驚ろき立つて一度にぱつと飛上り翻々と羽たゝ死ーて飛去ることるが間もなく貝鉦

の音微かよひゝぎ鯨波をぞつとあぐる聲風よつれて凄まゝく聞ゑければ平馬遽はくし柱よとぞつき身を傍だて、四方を屹然見てけるよむかふに連なる山々よ數千の明松かゞやきて奇羅星ならぶヶ如く螢の飛ぶに異ならずいろ〳〵の鏃捺物ひら〳〵とーて空になびき月に映じて夥たゞしくぞ見ゑたりける須破こそ敵の寄せたるぞ防げ守れと舞めく聲城の東西よ動搖めきけるヶ頓て寄手の大軍は早や先鋒を繰出し城門近く攻寄せたるよぞ其隊長は誰なるゝと旗の記號を見てけるに是なん秋山操なれば平馬は思わず小膝と打ち我れ彼ヶ爲めよ父を討れ無念骨墮よ徴せーかぞ證據なければ今日までも俱に天を頂だきしが今こそ晴らす父の仇イデ駈向ふて討取らんと小躍ーつ、樓上と飛ヶ如くよ下りんとするを傍よありた る武田傳平慌てゝこれを引止めハやまり給ふな小幡氏貴殿ハ最前御前よ於て諸士に何とういひ給へる小勢を以て大軍よあたるハ最ともむづかしき事なれば宜ーく守備を厳よして血氣に任せ城を出て戰ふなどの事などは慎むべしと言れ去ならずや然るを却つて貴下より此の軍令を破り給ふは目前父の仇敵を生け置くゝ忍びぬといハゞ云へ餘り輕舉にゆはずや殊に先刻忌ばーき夜禽の凶事と告げーといひ旁々もつておん身の上いと氣遣ゑしくゆらへハ此

儀ハ拙者にお任せあれ頼む〳〵といひけれど平馬が運の極めよや常にもあらで氣を憔ちヤア臆病なり武田氏譬ひ敵ハ如何程ありとも我が勇をもて戰へんにハ只一操よ揉散して目覺しき勝を得べきなり氣遣ひ給ふな武田氏其處退きたまへと振切つて遂に手勢を引具しつ早や城門へ來て見れば今や戰合眞最中にて敵も味方も筒口そろへ射發つ彈丸は雨霰いつ果つべくも見えざるにぞ平馬ハ部下よ下知を傳へて門を左右よ押開かせ功勳を共よせんものは續け〳〵と呼はりながら楯押取つて向ふよ蒐し眞一文字に衝いて出れば不意を打れて敵兵は周章狼狽大方ならず鉄砲を捨てゝ進るもおれば或は同志打なすもあり免角して平馬らは難んなく旗下へ斬入りつ目指ず讎の秋出ヶ遁出す處へ追すかりヤア未練なり秋山操己れ遁るとて遁さうか汝喜内と心を合せ非望を抱夫のみか我が父平馬を手にかけたる惡運盡て今爰よ天の冥罰ゐもひ知れといふより早く太刀拔きかざし微塵よなれと斬つくれば彼方もまれもの身をかハし鎗をひねつて立向ふゐぞ此ハしほらしやと突つかゝる穂先を躱てハ斫り入り〳〵難なく鎗の中央を斜よ發失を切落せばさしも我慢の秋山も平馬が本事よ辟易して叶ハじとや思ひけん急よ踵をめぐらして一目散よ逃出すを見掛よ似ざる臆病武士觀念せよ

と罵しり敢ず後裔よ斫り下ればアッと計りよ伏まろぶを起しも立てず乗つかゝり首かけ切つて大音に先手の大將討取たりと喚ける壁に味方の兵は愈々益々力を獲く猶一二町すこみしに平馬の武運や拙なかりけん此時敵より發したる小銃の彈丸に胸板を扶るが如く打貫れ急處の重傷堪へかねて撞と後へに仆れつゝ鬼を欺むく猛將も遂に敢果なくなりよけり茲に又た寛朝君ハ水野以下の士卒を隨へ軍の樣子いかゞぞと思ひ惱みて居給ふ處よ水野周之助春忠御進注と呼はつて飛ぶが如くよ馳來たる其の打粒を如何にといふよ白布の鉢巻して赤糸の腹巻の上に黑小袖を着なしつゝ袴のくゝりを高く把り髪へ手痛く働らきたるか大童になりたりける夫と見るより水野隼人樣子よと尋ぬれば血に染つたる白刀と杖よハッと吐息をつきなゝら偖も味方の兵士ハ小幡の下知よ從ひて城門近く攻寄せし敵の先鋒秋山が鋭ぞの勢を追散らさんと死と決めたる奮激突戰此處を先途と戰ふうち天魔の所爲か小幡氏自から先に約したる軍令をさへ打忘れ亡父の仇敵秋山を人手よ討して好きものか我討取らんと惶らるゝを諫むる者ハありしかどいつかな肯ぬ丈夫の決心直ちゐ城門押開きて群ける敵へ衝いて入り縱横無盡ゐ薙立つる了得武勇の太刀先に敵ハ忽ち色めきて三反計り引退ぞ

くを遂よ麾下まで押迫て難なく大將秋山が首と取られしを目覺しき味方は之よ力を獲て尙も激しく戰ふ所に運の極めか小幡生敵より放ちし鉄砲よ胸を打れて敢なき最期斯と見るより敵方は早や充分の勝色見ゐて再び兵を盛返し無二無三よ攻立れば味方は首を失ひて軍令更よ定まらねば次第〳〵よ追立られて逃るもあれば死するもあり瞬く間よ先手の一隊殘らず散亂なせしゝば敵ハ此圖を脫さじと續いて城内へ進入しに二の門近く攻入りしよぞ此勢ほひに氣を呑れ味方は一時よ敗北し太半斃れて候へば早や落城よ事決まり君の御身も氣遣はしければ心ならずも只一人守備を捨て馳まゐりぬ係れば君よハ一刻も早く城をば落させ給ひ何所よもあれ身を忍びて再度義兵を擧げたまふゞ上策とこそ思ふなれ父上如何よ覺すやと問へば隼人は聞く事毎に無念の涙遣る瀬なく腕を擦りて居たりしが此の一言に心づき如何ゐも汝ゲいふ如くかく乱軍よなる上は如何なる明智あるとても最早力よ及ばねば無念ながらも此の城を敵へ渡すの外ハなし就てハ末緑よ似たれども犬死するに忍ばねば拙者君の涙伴して今より此處を立去るべし汝ハ暫き止まりて我等主從程遠く逃延つらんといふ頃城よ火をかけ我君の討死ありし体に見せ充分敵を欺むきて汝も跡より來るべし必ず惱りて討死

するな心得たか言諭し御臺を初め花離にも早御用意と勸むれば兄の最期よ目も眩れて嘆き伏したる綾岡が涙拭ふて立上り墓なき女の心から兄上討死遊ばせーと聞に前後も打忘れ君の大事と毫ほども今まで心づかざりし不忠はお許ー下さりませ此上へ妾ゲ御臺の御友して花離の方諸共よ一方の血路を開ひて落行けば殿よも御安堵下さるべしといひつゝ銀の蛭卷したる長刀小脇よ掻込で最と精悼ーく見ければ隼人は屢々打黙因流石は小幡氏の妹御いーくも思ひ立れたり然らば先和女らより落ち給へと綾岡を先よ落し遣り續いて己も寛朝君のお伴なして落ち行きけり斯て周之介春忠は死殘りたる兵士と力を協せ思ひの儘よ敵を惱まーて早最此世よ望なーとて腹卷と除り上着を脱て服十文字にかきゝりて目覺ーき最期を遂げるよぞ是を聞く味方の兵士殘らず大庭に居並びて或い服切りて死するもあり或は刺違へて累なり伏するもあり暫時の中に數百人枕を並べて死ーければ血は流れて大地よ溢れ漫々とーて洪河の如く尸は四方に横はりて累々たる郊原の如しかゝる折ーも賊軍の大將茂野喜内士卒隨へこみいりて一々死鞭を點檢するよ寛朝君の在まさねば偖は彼奴物ゐ紛れて逃亡ーか殘り惜ーと思ひながらも故と眼を滋ーて心からとて小幡を初め可惜勇士を死なせしは

國家の爲よとよなき不幸然なから若殿寛朝君の何處へか落させ給ひーは不幸の中の幸ひなりとて喜悦の色を示せるい仁義を飾る賊臣の秘術とこそは知られけり斯て喜内は味方をすぐりて一度にどつと凱歌を揚させ酒を與へて勞を慰しこれより此城よ立籠りて官軍の襲ひ來る待ちけるが内心巧計のあるとなれば勝朝君の行跡を放捨惰弱に仕立んと日夜を分ず酒宴を張れど豫て御心と懸させ給ひ日外よりーて止置れし彼の染川が二世の夫秋山操の討死を心私かよ悲ーみて結ぼれ勝に見えければ殿は之を憂ひ給ひて何かな彼が心よ適ふ遊びをあして樂ーまさんと干戈の世よとあるまじき快樂ゐ耽り給ひーとぞ斯く英智の君を愚かならしめ世上の批判を受けさするも皆これ臣の臣たらざるに因るものなり人能く以て鑑みるべー話頭かはつて爰よ又た彼の綾岡等い萬死の中一よ生を得辛うじて遠くへ逃延けるがさーて行くべき方なければ奈何はせんと綾岡い一時途方に暮れたりしが忽地胸に浮びしは小森村なる仁平が事彼は此頃病よ罹り腰膝立ねば據ころなく此度の大事に出會ざるよし申し越せしと聞つれば彼よ便りて差かゝる御二方の御難儀と後の事をも語らはん爾じやくと心を決め此事二位よ聞えつゝ只管道を急ぐ程よ間なく仁平が在所に付き戰の樣子を語りー

上偖かく〳〵と頼みければ仁平れ之を領承し此等の事れ更ためて仰せらるゝ迄もなく臣が望に候へは少しも氣遣ひ給ふなと三人を慰さめ夫婦して最と賀体よ仕ふるうち水野隼人も此家を志ざしたる故と見え寛朝君と誘なひて此處に來たり日ならず仁平の病氣全快せしらば主從六人道を急ぎて江都へ赴く途すがら往來の人の咄しを聞くゐ豫て噂のありたる如く官軍の參謀香川敬藏薩藩の士有馬藤太以下と兵三百を率ゐ昨夜千住に着せしよし專ら風聞ありければ主從大よ喜びて間もなく千住よ至りければ御臺を初め花蘭等は別れて直ぐよ江戸へ行き殘る三個の主從は參謀の陳ゐ馳行きて結城沒落の一條を語り恢復の事を托するよ香川聞て深く其勞を謝し且曰く足下が王家に盡すの功たか〳〵輕しとすべからず其由總督の宮へ達すべければ頓て恩賞あるべきなり又結城恢復の事も正よ其期遠からねば必ず心なかれなと殘る方なくはからひに主從喜び交りけり斯て二日を經よければ諸道よ官軍大半江戸よ集まりて更に其向ふ所を部署し目會賊の根據となり野州宇都宮及び下總の結城流山等へ夫々兵を繰出しけるよそ參謀香川の軍勢も其敗以前に三倍し手筈充分整ひたれば四十里よ近き道程を夜を日よ繼いで馳付つ二日目の夜ゐ結城まで悉皆到着なせしらば明れば

四月十七日未だ朝霧も晴間なき曉方の闇よ乘じて早や先鋒と繰出し不意と覗ふて攻立てければ兵大いよ狼狽し銃よ太刀と騷く間に早く搦手を打破られ言甲斐なくも引退ぞく此有様よ勝朝もじめ了得不敵の茂野さへ胆を潰して軍勢と指揮する術も辨へ見るまに味方は數十騎筭を乱して斃れたる死骸を敵は乘こえ〳〵彌が上よも攻入りければ早や是までと思ひけん强き士卒は討死し弱きハ降參なせしかば勝朝喜内は割腹し染川は又た彼方此方と逃惑ふうち雜兵の刃の下に露と消え官軍賞と乘取つて全く平定したりけり

結城合戰花鍬終

明治十八年七月廿八日御届出版
全　十一月

定價金二圓

編輯人　京橋區[illegible]十九番地　安田金太郎

出版人　京橋區鍛屋町拾四番地　野村銀次郎

大賣捌所

日本橋區横山町三丁目　辻岡文助
同區同町二丁目　鶴聲社
京橋區尾張町　上田榮三郎
京橋區南鍋町　兎屋誠
日本橋區馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛
同區通り四丁目　丸屋鉄二郎
同區南傳馬町　春陽堂
同區藏前堀町　鈴木喜左衛門

東京圖書館

和書門	類	一函	二架	二號	八	一冊